

## 幼児期の開発教育

－研究保育「世界のお友達と一緒に遊ぼう」の実践から見えてきたもの

野 田 章 子

Development Education of Early Childhood

－Approach to Research and Childcare “Let’s Play with Friends from Around the World!”

Fumiko NODA

長崎女子短期大学紀要 第49号 令和5年度 別刷

*Reprinted form*

Nagasaki Women’s Junior College Annual Report of Studies, 49 : 27 – 35

2024

研究ノート

## 幼児期の開発教育

－研究保育「世界のお友達と一緒に遊ぼう」の実践から見えてきたもの

野 田 章 子

Development Education of Early Childhood

－Approach to Research and Childcare “Let’s Play with Friends from Around the World!”

Fumiko NODA

キーワード：幼児期、開発教育、アフリカ、子どもの遊び

### はじめに

本研究の目的は幼児期に適した開発教育の内容や方法を考え、保育現場での開発教育の実践を実現することである。開発教育（Development Education）は、1960年代に欧米諸国の国際協力に関する Non-governmental Organization（以下 NGO）から提唱された言葉である。欧米では1970年代になると、これら NGO を中心に発展途上国の問題が教育現場で取り上げられるようになり、その後ユネスコやユニセフなどの国連機関が関わり学校などの教育機関で開発教育が体系的に推進された。

日本では、1979年に「開発教育シンポジウム」が開催され、1982年に開発教育協議会（現在の開発教育協会）が設立された。その後は、定期的な開発教育の研究集会の実施、学校での開発教育の授業実践、開発教育地域セミナーなどの活動が展開され、開発教育の理念や内容の理解および開発教育の学習方法が討議されていった。しかしながらこの頃の開発教育は、国際協力に関する NGO や青年海外協力隊、YMCA、国際交流協会、JICA（国際協力機構）などが中心の教育活動であり、学校教育現場においてその内容が体系的に教えられることはなく、むしろその取り組みに消極的であった<sup>1</sup>。そのような学校教育現場の風潮が変化

したのは、1996年の答申で「総合的な学習の時間」が新設され、その第2部第1章に「今日、国際理解、情報教育、環境教育などを行う社会的要請が強まってきているが、これらはいずれの教科等もかかわる内容を持った教育であり、そうした観点からも、横断的・総合的な指導をしていく必要性は高まっている」と記されたためである。学校教育現場は、この「国際理解教育」という新たな内容と紐づけて、開発教育を教育活動に取りあげ始めた。また、開発教育の実践が参加型であり、「総合的な学習の時間」が目指す学習形態と合致していたことも大きい。開発教育協会側も『わくわく開発教育－参加型学習のヒント』（開発教育協会、1999）や『いきいき開発教育－総合学習に向けたカリキュラムと教材』（開発教育協会、2000）など<sup>2</sup>を出版し、学校教育に活動を広げていった。近年では、『SDGs と開発教育－持続可能な開発目標のための学び』（田中 2018）などが出版され、開発教育は学校教育現場の SDGs の学びにも活用されるようになってきている。

このような開発教育の動向において現在注目されていることが、幼児期の開発教育の普及と促進である。「世界幼児教育・保育機構 Organisation Mondiale Pour l’Éducation Préscolaire（以下 OMEP と略す）」では、2009年から「幼児期から

の持続可能な開発のための教育 Educational for Sustainable Development (以下 ESD と略す)」を主要な取り組みにあげ、社会・文化、環境などの学びを幼児教育に取り入れている。ESD には、人権問題や国際理解、多文化共生などの開発教育に関連する内容<sup>3</sup>が含まれている。しかしながら日本においては、開発教育の幼児期の実践は未だ少ない<sup>4</sup>。幼児期の開発教育の先行研究には、秋山 (2022) の実践があげられる。秋山は「世界とのかかわり」の実践で、「様々な人がいる世界を知る」をねらいに、あいさつ、食べ物、国旗、民族衣装を比較して、互いの違いを認めたくて、同じであることに気づく実践「違っても一緒だよ！」を提案している。秋山の実践では、幼児が肌や髪の色、服装、食事などから自分との違いに自ら気づける点が高く評価できる。一方で、自分と一緒に感じる点が犬や猫をかわいいと思ったり、花をきれいと思ったりする気持ちであることには疑問を感じる。なぜなら人の気持ちは多様であり、かわいいやされいだけでまとめることはできないからである。開発教育の実践を通して幼児自身が「違っても一緒だよ！」と気づける手立てが必要だと指摘したい。よって本研究では、他国の子どもと自分を比べて違いに気づき、さらに違っても同じであることを実感できるような開発教育の内容や方法を考え、幼児期の開発教育の意義を示唆したい。



写真1 実践の様子

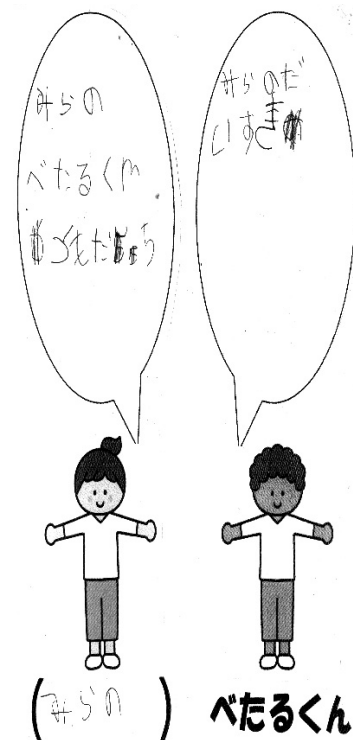


図1 ふきだしのワークシート<sup>6</sup>

## 1. 研究の方法

本研究では、2023年12月6日に、S市Hこども園にて約60分の研究保育(写真1)を実践し、その分析をおこなった。対象は年長児のS組(男児9名、女児14名の計23名)である。

分析には、実践で使用したワークシート(図1)を用いた。ワークシートには、ふきだし<sup>5</sup>を使い、子どもの考えや思いを言葉で表現させ、その心情の変化を考察した。その際文字が書ける子ども達は自分で記入したが、まだ文字を習得していない子どもの場合には授業者が、言葉を聞き取り代筆した。ワークシートは、実践の最初と最後の2回記入させた。

## 2. 本実践の概要

### (1) 子どもの実態

S組の子ども達は、体を動かして活動することが大好きで、ルールのあるゲームは特に興味をもち、ルールを理解して参加することができる。しかし熱中すると周りが見えなくなり、自己中心的な行動をしてしまう子どももいる。遊びは、ジェンガなどを使った積み木遊びやブロック遊びが人気だが、鬼ごっこやドッジボールなどの集団遊びも大好きである。学習面では、絵を書くことが得意な子が多く、ひらがなは約半数の子どもが習得している。

## (2) 本実践のねらいと評価

本実践の活動名は「世界のお友達と一緒に遊ぼうーアフリカ（エチオピア）」である。本時のねらいには、以下の2点をあげた。1つ目は、「アフリカの子どもの遊びを知る」である。これは、開発教育の目標<sup>7</sup>にある世界の文化の多様性を知るにつながる。2つ目は、「アフリカの子どもと自分たちが同じように鬼ごっこをして遊ぶことを知り、同じ地球に生きる友達であることに気がつく」であり、SDGsの目標17に関連している<sup>8</sup>。本実践の内容にはS組の子どもの「積み木が得意で、鬼ごっこ好き」という実態を踏まえ、アフリカのエチオピアの子ども達が遊んでいる「コルキー」<sup>9</sup>を選んだ。この鬼ごっこは、瓶の蓋や石などを積み上げることから始まり、その積み上げたものが崩れたところから鬼ごっこが始まるため、S組の子どもに適した活動だと考えられる。また、子ども達には馴染みのないアフリカではあるが、エチオピアが原産のコーヒー豆は各家庭で使われていることが多く、アフリカの中では比較的身近に感じやすい国である。過去に実践した小学校での開発教育の授業でも、コーヒーの国エチオピア（東アフリカ）やチョコレートの国ガーナ（西アフリカ）など子どもの生活とつながっている国が興味関心を引き出し、理解を深める手立てになることが明らかになっている<sup>10</sup>。本実践で子どもが学習する具体的内容は、「世界地図を見る」、「アフリカを知る」、「コーヒーやチョコレートがアフリカから日本に届いていることを知る」、「アフリカの子どもを知る」、「アフリカの子どもの遊びを体験する」である。よって本実践の評価は、「アフリカの友達と自分の違いや共通点に気づけたか」、「アフリカの友達の鬼ごっこに興味をもてたか」、「アフリカの子どもと友達になりたいと思えたか」とする。

## (3) 本実践の計画

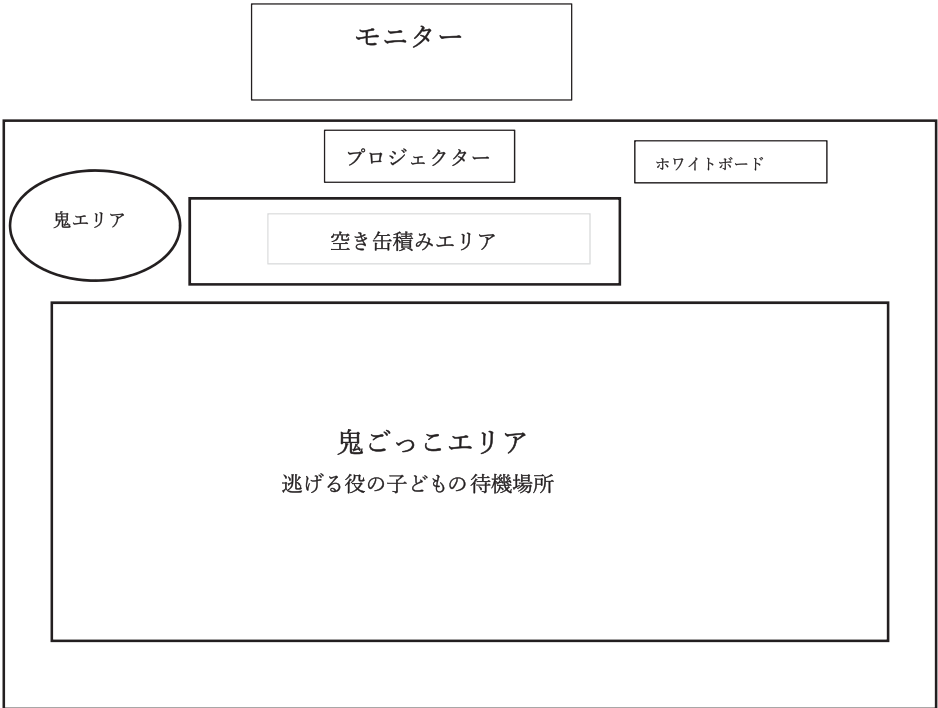
2023年12月6日S市Hこども園のS組の年長児を対象にした実践に関する保育計画案を表1に示した。

## (4) 実践の記録

最初に子ども達に「今日はお友達を連れてきました!」と言い、アフリカの男児のペープサートを見せた。そして、「みんなと似ていますか?」と問いかけた。多くの子どもが「違う!」と答え、髪や肌の色が違うこと、髪がくせ毛であることなどを理由にあげた。「外国人!」と答える子どもがいた。次に日本人の男児と女児のペープサートも見せて、自分はどのイラストに似ているかと問うと、男児は日本人の男児、女児は日本人の女児のペープサートで挙手していた。さらに遊びに来てくれた友達は「べたる」という名前であることを伝え、「どこから来たでしょう?」と問いかけると、「アメリカ!」と答える子どもがいた。その後「ここから来ました!」とイラストで描かれた子ども用のアフリカの地図を見せ、その場所がどこにあるのか上記と同じ子ども用の世界地図を使ってマッチングさせた。「アフリカ!」とすぐに答える子どももいたが、多くの子どもが地図を見慣れていなかったため、まず日本の場所や大きさを確認し、日本と比較しながら、アフリカと日本が遠く離れていること、アフリカは日本が約80個入るぐらいの大きさがあり、50個以上の国があることを伝えた。この子ども用のアフリカの地図上には、動物のイラスト（ライオン、キリン、シマウマ）が描かれていたため、アフリカを「動物園!」と答える子どももいて、多くの子どもがアフリカは動物がいるところだと捉えた様子だった。ここで「アフリカからみんなの家に届いているものがありますよ。何かな?」と問いかけると、「バナナ!」「みかん!」「牛乳!」と口々に答えていた。それから答えのチョコレートとコーヒーのイラストを地図上のガーナとエチオピアの上に貼り、べたる君はコーヒーの国エチオピアから来たことを伝えた。

以上のような活動の後ワークシートを配り、ワークシートの日本人の子どものイラストに自分の名前を書き入れさせ「べタル君とお話してみましよう!」と投げかけた。子ども達は、自由にワークシートのふきだしに言葉を書き入れていた。そしてデジタル教材「エチオピアの社会と舞踊」の

表1 保育計画案

<p>(1) <b>活動名</b> 「世界のお友達と一緒に遊ぼうーアフリカ (エチオピア)」</p>
<p>(2) <b>準備物</b> 世界地図、アフリカの地図、エチオピアの地図、空き缶 (人数分)、                  ペーパーサート (アフリカ男児1、日本男児1、日本女児1)、                  チョコレート・コーヒー・国名などの貼り紙、赤白帽子、                  ふきだしワークシート (人数×2)、鉛筆 (人数分)、                  プロジェクター、パソコン、ホワイトボード</p>
<p>(3) <b>お遊戯室配置図</b></p> 
<p>(4) <b>遊び方</b></p> <p>    <b>コルキー (鬼ごっこ) のルール</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 鬼を決める (最初の鬼は先生、子どもの場合は状況に応じて人数を決める)</li> <li>② 空き缶積みグループと逃げるグループに分かれる</li> <li>③ 鬼は鬼エリアに、逃げるグループは鬼ごっこエリアで待機</li> <li>④ 空き缶積みグループが空き缶を積む</li> <li>⑤ 空き缶が倒れたらみんなで「コルキー！」と叫ぶ</li> <li>⑥ 「コルキー！」の合図で鬼はエリアから出て捕まえに行く (20秒間)</li> <li>⑦ 鬼に捕まった子どもはエリアの外に座る</li> <li>⑧ 最後まで鬼に捕まらなかった子どもに拍手をする</li> <li>⑨ 役割を交代してくり返す。</li> </ol>

(5) 保育指導案			
日時 2023年12月6日(水)			
対象 年長(5)歳児 男児(9)名 女児(14)名 計(23)名			
子どもの姿	体を動かして活動することが大好きで、ルールのあるゲームは特に興味をもち、ルールを理解して、参加することができる。何事も楽しく活動できるが、熱中するあまり、周りが見えなくなり、自己中心的な行動をしてみよう園児の姿もみられる。	ねらい	アフリカの子どもの遊びを体験し、アフリカの子どもが自分たちと同じように鬼ごっこをして遊ぶことを知り、同じ地球に生きる友達であることに気がつく。
時間	予想される子どもの活動	援助・指導の留意点	環境
10分	活動に興味をもつ 世界地図に興味をもつ 日本に興味をもつ アフリカに興味をもつ エチオピアに興味をもつ	ペープサートのべたる君をみせる べたるくんはどこから来たのかな？  世界地図を見せる 日本はどこか聞く 日本はどんな国か聞く アフリカはどこか聞く アフリカはどんな国か聞く 教えるのではなく、気づかせるような質問の仕方を心がける	ペープサート ○○ちゃん ○○くん べたる君  以下☆を白板に貼る ☆世界地図 ☆アフリカ地図 ☆にほん ☆あふりか ☆があな ☆えちおびあ ☆チョコレート ☆コーヒー ☆おすし
10分	アフリカのお友達「べたるくん」に話しかける言葉をふきだしに書く	べたるくんにお話ししてみよう！ ふきだしのワークシートを配布する  どんなお話する？など書きやすくなる声掛けをする 字が書けない子どもには、発言させその言葉を授業者が書き込む	ワークシート・鉛筆を配布する  ワークシートを回収する
5分	べたるくんの住んでいるところをデジタル教材「エチオピアの社会と舞踊」で視聴する	地図やイラストからのイメージでは分からない実際のエチオピアの様子を映像で伝える	デジタル教材「エチオピアの社会と舞踊」の「どんどん変わるエチオピアの社会」を映す

<p>20分</p>	<p>ビルがあるよ 電車があるよ ゲームセンターがあるよ 動物だけじゃないな</p> <p>コルキーをしている子どもの映像を見る</p> <p>べたるくんの遊びに興味をもつ 鬼ごっこだ 楽しそう やってみたいな 難しそう</p> <p>「コルキー」のルールを理解する 空き缶積みグループや逃げるグループ、鬼グループになって遊ぶ</p> <p>捕まって悔しがる 逃げ切って喜ぶ 空き缶が上手く積めて喜ぶ 空き缶が崩れて驚く 大きな声を出す 思いっきり走る</p>	<p>一時停止しながらゆっくり視聴する</p> <p>コルキーのルールを説明する</p>	<p>コルキーの映像を映す</p> <p>空き缶を人数分用意する 事前にグループを3つに分けておく 各エリアに目印をつけておく</p> <p>鬼に赤帽子をかぶせる</p>
<p>10分</p>	<p>口々に感想を言う</p> <p>ワークシートのふきだしに言葉を書く</p> <p>終わりの挨拶をする</p>	<p>べたるくんの教えてくれたコルキーはどうでしたか？</p> <p>では、最後にべたるくんともう一度お話ししましょう！</p> <p>文字の書けない子には、なんてお話する？と聞いて、授業者がふきだしに書き込む</p> <p>またみんなで遊びましょう！</p>	<p>ワークシート・鉛筆を配る</p> <p>ワークシートを回収する</p>

「どんどん変わるエチオピアの社会」<sup>11</sup>を用いて、エチオピアの首都の映像を見せた。エチオピアの首都では、現在高層ビルが立ち並び、高速道路が建設され、ライトレールが走っている。また大きなゲームセンターなどもある。ゲームセンターでゴーカートに乗っている親子の映像を見た時には、「行きたい！」などの声があがった。アフリカを動物園みたいな所と想像していた子ども達だったが、日本と同じような所もあると気づいた様子だった。

それから、エチオピアの子どもたちがコルキーをして遊んでいる映像をみせ、「今日は、べたる君にコルキーを教えてください！」と呼びかけ、コルキーのルールを説明した。そして、鬼を担任の先生、子どもを缶積みグループと逃げるグループの2つに分けてコルキーを開始した。7～8人の缶積みグループは1人1個ずつ缶を積み、5つ目ぐらいまでは順調だったが、子どもの背の高さより高くなった辺りで崩れた。そこでみんなが「コルキー！」と叫び、鬼ごっこが始まった。しかし、待機するはずの缶積みグループの子どもも一緒に逃げてしまったため、担任の先生対子ども全員の鬼ごっこになった。この1回戦の様子から、子ども全員が鬼ごっこに参加したいと思っていることが分かったので、2回戦ではルールを変更し「コルキー！」で全員逃げて良いことにした。3回戦は鬼を子どもから選ぶことにしたが、ほぼ全員が鬼になりたいと手をあげたため、選ぶのが大変になった。また、缶積みをした子どもは2～3人になってしまった。最初に手を挙げた子ども3人を鬼に選び、缶積みはやりたい子どもにしてもらうことにして、3回戦を始めた。しかし鬼にタッチされても走り続ける子どもがいたため、鬼の子どもから不満がでてきた。また途中で転んで泣き出す子どもや疲れてやめたいと言いつつ子どもがいたため水分補給の休憩をとったところ、缶を蹴って遊ぶ子どもや、缶を転がして遊ぶ子どもなどが出てきた。4回戦をしたい子どもや鬼になりたい子どももいたが、集中力が続かない子どもがいる様子だったので、休憩の後コルキーを終了した。

最後に「今日はどうでしたか？」と問いかけ、「べたる君にお話してみましよう！」と伝えた。ワークシートを配布すると、最初よりもスムーズにふきだしに言葉を書き込み始めた。終わりの挨拶をすると、ペープサートのべたる君に「バイバイ」「また遊ぼうね！」などと声をかけていた。

### 3. 分析と考察

実践で使用したワークシートを分析して、本実践の振り返りをおこなう。1回目と2回目のワークシートのふきだしに書かれていた子どもの言葉を以下表2に示した。

1回目のふきだしには、「きりん」や「しましま」をはじめ動物の名前が書かれていたため、アフリカの地図を見て動物に興味をもったことが読み取れる。また、「べたる」や「ちょこ」などもこれまでの話を聞いて浮かんだ言葉だと分かる。さらに「ようちえんならってる？」や「べたるくんきょうはなにをするの？」は、ふきだしを使ってべたる君と会話をするイメージが持っていると読み取れる。その他「おはよう」や「さようならげんきで」、「こんにちわ」は挨拶であり会話のふきだしにふさわしい言葉である。また「だいすき」や「すき」は子どもが使いたい言葉であり、「さんた」はこの時期の子どもが一番関心のある言葉である。その他の単語や文章にならない言葉は、子どもが覚えているひらがなを書き出したか、書けなくて諦めたと思われる。このように1回目のふきだしは、取り組みの理解度やひらがなの習得には個人差があるものの、子どもが書きたいことを書いている、または、書こうとしている状態であったと考察できる。

2回目のふきだしには、「ありがとう」が多く書かれていた。1回目にはなかった言葉である。また「いっしょにあそんでくれてありがとう」や「あそんでくれてありがとう」、「またあそぼう」から、子ども達がべたる君と一緒に遊んだ気持ちになっていることが読み取れた。さらに「べたるくんだいすき」などから、べたる君に親しみを感じている子どもの様子が伺え、そのような気持ちが「ともだち」と表現されていた。また「ぼくの

表2

名前	1回目	2回目
1	べたるくんさようならげんきで	べたるくんあそんでくれてありがとう
2	ねこちゃんだいすき	べたるくんだいすき
3	さんただいすき	ぼくのなまえはべこくん
4	べたるくんさようなら	みらのべたるくんともだち
5	ようちえんならってる？	あそんでくれて♡ありがとう♡ べたるくん すき
6	おはよう	いっしょにたべよう ちょこ
7	ねこだいすき	あそぼう さんきゅー
8	こんにちわ きりんのにのりたい ちょこちょうだい	いっしょにあそんでくれてありがとう だいすき
9	さんさ	だいすき
10	しまうますき きりんすき	またあそぼう
11	べたるくん	べたるくんだいすき
12	さんただいすき	あそんでくれてありがとう
13	べたるくんきょうわなにをするの？	ほるきー こうたい おにがいい！ コーヒー チョコレート
14	さんたさんばいくがほしい	ありがとう
15	へこよちた	だいすき
16	ぐるねい	べたるくん
17	ねこすき しまうますき	ぺんたくん
18	う	チョコレート

なまえはべこくん」と書いた男児は、自分の名前をべたる君と似ている「べこくん」に変えていた。日本とエチオピアの名前の違いに気がつき、べたる君と同じような自分の名前を考える発想が面白く、興味を持ったことが読み取れる。その他、ひらがなを習得していない子ども達も2回目は「だいすき」「べたるくん」「ちょこれーと」と書いてあり、この活動で興味をもった言葉を書いていた。このことから、2回目のふきだしはべたる君に対する感謝の言葉や活動で印象に残った言葉であり、活動を体験しなければ書けなかった言葉が書かれていたと考察できる。

#### 4. 結 語

幼児期の子どもがアフリカの鬼ごっこを知り、遊びを通してアフリカの子どもを友達と思えたことが本実践の意義である。幼児期の子どもの想像力は素晴らしい。活動の終わりには、ペープサー

トのべたる君に「バイバイ」「また遊ぼうね！」と声をかけ、手を振ることができるのである。そして、「いっしょにあそんでくれてありがとう」、「またあそぼう」という言葉から、子ども達がペープサートのべたる君と一緒に遊んだ気持ちになったと分かる。さらにその体験の共有からべたる君に対して「ともだち」という言葉を書くことができた。

開発教育の目標「世界の文化の多様性を知る」やSDGsの目標17の「パートナーシップで目標を達成しよう」は、異文化理解から始まる。しかし、本実践で扱ったアフリカは行ったことがない人が多く馴染みのない場所であるため、自分事に考えることが難しい。そのようなアフリカの学習には、疑似的社会体験が有効である。その役割を担えるのが伝承遊びや民族舞踊だといえよう。伝承遊びや民族舞踊には、それを継承する人々の思いや考え方、習わしや決まりが内在しているため、

それを体験することは文化的・社会的背景を知ることになる。学習者は、舞踊や伝承遊びを介した疑似的社会体験を通してアフリカの人々とつながることができるのである。

今回教材化したコルキーは、伝承遊びではないが、アフリカの子ども達を知ることができる。捨てられているコーラの蓋を集めてコルキーをつくり出す逞しさ、積み上げた蓋をボールで倒すとボール当て鬼が始まるというコルキーのアレンジを考え出す創造力、ボールがない時は古い靴下に草をつめて丸くしたものを使って代用するなどの発想力などである。どれも日本の子ども達にもぜひ見習ってほしいアフリカの子ども達の生きる力である。

研修で教職員にアフリカの映像を見せると、「不衛生な感じ」「トイレが無理」「水が汚い」「虫が多い」などネガティブな意見が聞こえてくる。しかし、SDGsでは先進国の豊かさが地球破壊の要因であると指摘されており、先進国は途上国の生活を学ばなければならない現状がある。多くの人が日本にあってアフリカにないものはすぐ指摘できるが、アフリカにあって日本にないものには気づかないのである。

初めて世界の扉を開く幼児期の開発教育では、アフリカのポジティブな部分に焦点をあてたい。そして、アフリカに生きる子どもの逞しさや明るさを日本の子どもが知り、互いを友達と感じられるような実践を積み重ねることが必要だと感じる。幼児期・児童期に培った友達という意識が、今後互いを尊重し、心配しあえるような関係をつくるための原動力になると提案したい。

#### 注

- 1 田中は、1980年代の学習指導要領の内容が過密であったことや「受験戦争」の最盛期であったことなどをあげその理由を述べている（田中2018：4）
- 2 2003年に開発教育協会出版した『参加型学習で世界を感じる－開発教育ハンドブック』は教育現場に広く普及した。
- 3 例えばケニアの子どもに男女共同参画を体験させる実践例として白石・加藤は次のようなものをあげている。「UKの子どもたちがよく行っている遊びに、変装して警察官になったり、医者になったり、科学者になったり、という劇遊びがある。この変装するための材料

をUKからゴンドゥというケニアの町に送ったのだ。この写真の女兒は医者になっているが、このような社会劇を通してロールモデルを体験していく」（白石・加藤2016：68）

- 4 報告されている幼児期のESD実践事例には、富田他（2018）、井上（2020）、青木（2023）などがある。
- 5 ふきだし法の検証方法については野田（2020a：26）参照。
- 6 イラストは『保育で取り組むSDGs』（新星出版社）巻末付録利用。
- 7 具体的な教育目標として以下の5項目をあげている。
  - ①開発を考えるうえで、人間の尊厳性を前提とし、世界の文化の多様性を理解すること
  - ②地球社会の各地に見られる貧困や南北格差の現状を知り、その原因を理解すること
  - ③開発をめぐる問題と環境破壊などの地球的諸課題との密接な関連を理解すること
  - ④世界のつながりの構造を理解し、開発をめぐる問題と私達自身との深い関わりにきづくこと
  - ⑤開発をめぐる問題を克服するための努力や試みを知り、参加できる能力と態度を養うこと
- 8 SDGs17は「持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する」である。
- 9 「コルキー」とは、「コーラの蓋」という意味である
- 10 ガーナは遠藤（2010：1-25）、エチオピアは野田（2020a：23-32）を参照。
- 11 野田章子作成のデジタル教材。詳細は野田（2020b）参照。

#### 引用・参考文献

- 青木一永『SDGsと保育スタートBOOK—つながる保育で実践する幼児期のESD—』（2023）株式会社みらい
- 秋山宏次郎（監）『保育で取り組むSDGs』（2022）新星出版社
- 遠藤保子（2010）「スポーツと開発教育—モーションキャプチャを利用したアフリカの舞踊教材—」日本スポーツ人類学会
- 寒川恒夫（監）『世界の子どもの遊び』（2015）株式会社PHP研究所
- 田中治彦（編）（2008）『開発教育』学文社
- 田中治彦・三宅隆史・湯本博之（編）（2018）『SDGsと開発教育』学文社
- 富田久枝他『持続可能社会をつくる日本の保育』（2018）かもがわ出版
- 野田章子（2020a）「国際理解教育とアフリカの民族舞踊—小学校におけるデジタル教材を活用した実践を通して—」日本国際理解教育 Vol. 26 明石書店
- 野田章子（2020b）「アフリカの民族舞踊に関する教材研究—デジタル教材「エチオピアの社会と舞踊」の開発を通して」立命館産業社会学会
- 馬場圭一郎・岸本肇（編）（2009）『—総合的な学習・国際交流を盛り上げる—世界の子どもの遊び事典』明治図書